

全校のみなさん、おはようございます。

先週半ばあたりから気温がぐっと下がり、冬が駆け足でやって来そうな気配です。季節の変わり目は自身の体にも影響がでてきますので、体調には留意したいものですね。

さて、今朝は「人間に生まること、大いなるよろこびなり」という言葉を紹介します。これは源信という方の『念仏法語』という書物の中に書かれてある言葉で、「人間に生まれたことは喜ばしい」という意味です。

この言葉は、今月本校で行われた報恩講の講師、マイケル・コンウエイ先生の法題でもありました。

マイケル先生ご自身は、この源信の言葉を受け止められず「何故私は生まれたのか」と悲嘆されていました。先生はその要因を、ご自身の家族の問題とお話されていました。

私たちも同様に、普段の生活の中で、「何故」、「どうして」、「何か私が悪いことをしたのか」と思うように、目の前の現実を受け止められないことがあります。

そんな私たちの姿を「妄念の外に別の心もなきなり」と源信は『念仏法語』で著しています。

「妄念」とは、ありもしないこと、実態のないこと、「ああなりたい、こうなりたい」という、私たち人間の思いのことをさします。思い返せば私たちは普段から、この妄念を抱えて生活しています。そして、私たちの今までの生活を振り返ると、妄念が打ち破られる、つまり、思い通りにならないことが多かったのではないのでしょうか。

マイケル先生はこの妄念の本質を「日ごろのこころ」と言われました。思い通りになれば喜んだり、安心したり、思い通りにならないければ悲しんだり、不安になったりと、同じ現実でも、条件や自分の都合によって受け止め方がコロコロ変わる。だから、いつまでも「思い通りの人生を通して、そのように受け止められまいと、マイケル先生は、ご自身の人生を通して、

思えば私たちが人間に生まれたということ自体が「思い通り」になっていません。これからも自分の思い通りにならないことが沢山あるでしょう。しかし、源信をはじめ、私たちの先人がそれでも「人間に生まること、大いなる喜びなり」と、自分自身を、自分の人生を受け止めたのは何故なのでしょう。先日の報恩講に、そのヒントがあったのかもしれないね。